

発表題目：マダガスカル北西部の森林破壊にともなう生業基盤の崩壊と住民の対応策  
—水稲作と結びついた住民の自発的な環境保護—

所属： 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

氏名： 山田 祐

1200 字程度で発表内容を記載してください。

急激な人口増加や経済活動の活発化によって引き起こされる環境破壊は、いまや世界各地で重要な問題となっている。アフリカ大陸の南東に位置するマダガスカルでも環境問題は深刻である。1950年代から現代までにマダガスカルの人口は6倍ほどに増加し、人口増加にともなう食糧や燃料、土地の不足などが顕在化している。マダガスカルは他大陸から隔たった島嶼国であり、長い期間にわたって独自の生物進化がみられ、ユニークな生態系が成立している。しかしその貴重な自然環境は、紀元前後に入植した人類の農地開発や狩猟・採集、牧草地の造成などによって脅威にさらされ続けている。

とくにマダガスカルの森林はその大部分がすでに失われており、原生植生から80-90%の面積が消失したといわれている。北西部の落葉乾燥林ではその影響が顕著であり、人類の定住以降97%の森林が減少したとされるほか、現在でも焼畑農耕や樹木伐採、放牧を主因として森林破壊は急速に進行している。森林は動植物の生息地となるだけでなく、生態系サービスとして食用資源や薬用資源、物質文化用の資源、あるいは豊かな水、土壌などを供給する住民にとって重要な存在である。住民生活をはぐくむ森林の消失はローカルな危機でもあり、貴重な生物種が絶滅するというグローバルな危機でもある。

国内で最大の落葉乾燥林面積を有するアンカラファンツィカ国立公園周辺では、多くの住民が水稲作を主生業として生活している。稲作には水源涵養林として、また腐植土の供給源として落葉乾燥林の存在が不可欠である。多くの住民は近年の大規模な森林減少にともなう、土壌侵食や農業生産性の低下が発生していることを認識し、森林破壊と生活基盤の崩壊に対して危機感をもっている。

国立公園周辺では森林破壊によって大量の土壌が流亡し、その土砂が低地の水田に流入している。水田における土砂堆積は年々コメの収穫量を減少させており、住民は高収量品種の選択や草木灰とたい肥を用いた地力回復などを図っている。また土砂堆積への対策として、土砂を運搬する河川を灌漑水源とすることを回避し、上流域に森林が残されている河川を水源に利用したり、河川と水田をつなぐ水路を延長・複雑化させ、水路に土砂を堆積させる対応などが見られた。

住民は森林減少、森林破壊への対策にも取り組んでいる。住民は森林の回復を促すため、公園を運営する国立公園局や国際 NGO と提携して植林活動に従事している。また森林破壊に対しても国立公園局と連携し、参加型の保護活動として監視業務や防火帯の造成などに取り組むほか、近年では自発的に村の森林や牧草地を管理する活動も見られた。

このような森林破壊にともなう環境変化へ対応する住民の生活様式に着目し、住民が社会環境を守りながら自然環境を保護しようとする活動は、住民と政府機関、国際 NGO、そして貴重な生態系とそこに暮らす住民の生活を深く理解する研究者がそのアリーナに参画することで成立している。